

え？ 見ることでできた？ エーミール！

ヘッセの『少年の日の思い出』は、私も少年の日、国語の時間に読んだ思い出がある。エーミールという少年がなぜか深く心に残っている。「あらゆる点で模範少年」で「非の打ちどころがない」という悪徳をもっていた」と描かれている。「非の打ちどころがない」ことが「悪徳」として描かれることに衝撃と共感を覚えたものだ。

主人公の「僕」はそのエーミールの宝物のクジャクヤママユを衝動的に盗み出して、台無しにしてしまう。謝りに行った「僕」に対して、エーミールは、舌打ちをして（原文は「口笛を吹く」という動詞のようだが）、「そうか、そうか、つまり君はそんなやつなんだな。」と言う。そして、「そのうえ、今日また、君がちょうをどんなに取りあつかっているか、ということを見ることでできたさ。」と言う。

この言葉は冷たい。ドイツ語はよく

知らないのだが、原文は、*Man*（不定人称、ここではエーミール本人のこと）*hat*（完了）*ja*（yesに相当）*heut*（今日）*wieder*（再び）*sehen*（見る）*können*（できる）*wie*（いか）*du*（おまえ）*mit*（withに相当）*Schmetterlingen*（蝶）*umgehst*（扱）。「また」だから以前見た時のこともふまえている。そして、「ja」という言葉があるが、これはすぐく皮肉っぽい感じの用法という。そうした口ぶりが訳してある。

私は、この訳で使われている日本語の可能表現に立ち止まりたい。実は、日本語では、可能表現は普通イイコトに対して使う。ワルイコトについては言わない。例えば「会議で居眠りができた」など言えば、どうでもいい会議で居眠りをして睡眠不足を補ったといったイイコトになる。大切な会議なら可能表現は使わないで「居眠りをし

てしまった」と言うのだ。

だから「僕は失敗ができた」なんて言わない。「おお、太りすぎて、ベルトをぶっちぎることができた！」などとも、言わない。

さて、せっかくの宝物が台無しにされたエーミール。でもその犯人は友人で謝りに来た。それに対しての言葉が「君がちょうをどんなに取りあつかっているか、ということを見ることでできたさ。」だ。可能表現だ。「見てしまった」とは言わない。そこにあるのは、愚かな奴ということがわかってよかったというニュアンス。実に冷たい軽蔑がある。

人間は愚かだ。ばかな失敗もする。でも、こう言われれば、「僕」は救われない。ここを読む時私は、「え？『見ることでできた』？……エーミール！『見てしまった』だろっ、そこは！」と、思わずツツンしてしまうのだ。

早稲田大学教授

もりやま たくろう
森山卓郎